



こ と は じ め

日英交流事始

—幕末から明治へ—

日時:平成 21 年6月2日(火)~9月30日(水)

場所:外務省外交史料館別館展示室

目次

日英関係のあけぼの	2
展示史料	
1. 日英修好通商条約（「日本国大不列顛国間修好通商条約」）	
2. 日英修好通商条約 日本側批准書（複製）	
参考 日英約定（「日本国大不列顛国約定」）（複製）	
参考 エルギン使節団と条約締結交渉	
3. 日英修好通商条約 英国女王批准書	
4. 日英修好通商条約 批准書交換証書	
5. オールコック委任状（写）	
6. 「東禅寺英国仮公使館之図」	
参考 オールコックの將軍謁見式	
7. 東禅寺護衛の武士へのメダル贈与を告げる英国公使書翰（写）	
参考 英国政府から護衛の武士に贈られた銀メダル	
開港開市延期問題と文久遣欧使節団派遣	10
展示史料	
8. 老中とオールコックとの会談録	
9. 文久遣欧使節団 竹内下野守写真	
参考 文久遣欧使節団随員写真	
10. 文久遣欧使節団 随員名簿	
11. ロンドン覚書（「倫敦約定」）	
参考 ロンドン万国博覧会と遣欧使節団	
明治維新期の日英交流	16
展示史料	
12. 「改税約書」	
13. パークス襲撃地点略図	
14. ヴィクトリア女王より明治天皇宛 特命全権公使パークスの信任状	
15. 英国王子訪日に関する澤宣嘉書翰	
16. 延邊館石室入口の図	
17. 明治政府のエディンバラ公への接待振りに感謝するパークス書翰	
主要参考文献・画像提供	22
関連年表	23

凡例

- ◎本冊子では、戦前期に使用された一部用語を、歴史的用法としてそのまま使用しました。
- ◎判読し難いと思われる人名、用語にはルビを付しました。また西洋人の人名は、カタカナの後（ ）内に原綴りを示しました。
- ◎当該期、英国の正式名称は「グレートブリテン及びアイルランド連合王国」ですが、本冊子では、「英国」あるいは「英」としました。
- ◎年代の表記は西暦の後、（ ）内に和暦を示しました。また日本が直接関与していない事項など、一部の年代は、西暦のみを表記しました。
- ◎史料の翻刻文は、一部の旧字を新字に改めるなど、表記に配慮しました。
- ◎画像、パネルなどの一部展示品については、本冊子に掲載していないものもあります。

日英関係のあけぼの

日本と英国との関係は、古くは徳川家康と三浦按針^{あんじん}（ウィリアム・アダムズ: William Adams）が交流し、一時期交易する間柄にあったことが知られている。しかし家康の死後、徳川幕府が鎖国政策を採ったため、両国が実質的に交流するのは1854年（嘉永7年）以降のことである。

鎖国時代の日本には、オランダ商館長からの情報（「オランダ風説書」^{ふうせつがき}）により、英国が東アジアに勢力を拡大していることが伝わっていた。アヘン戦争（1840～42年）で清国が英国に敗北し、不平等条約を締結したことが伝わると、幕府は1842年（天保13年）、外国（特に英国）との戦争を避けるため、外国船に対する無差別砲撃政策をやめ、代わりに薪水を供与することとした。

また、クリミア戦争（1854～56年）が勃発すると、ロシアと交戦する英国軍艦が日本近海を航行するようになった。1854年9月7日（嘉永7年7月15日）、英国東インド艦隊司令長官スターリング（Sir James Stirling）提督が長崎に入港し、英国船の日本港湾への寄港を認めるよう求めた。その結果、英国船が長崎、箱館に寄港して薪水、食料を調達できること、今後日本が外国に対して開く港は英国に対しても開くことが約束された（「日英約定」^{やくじょう}）。

自由貿易を望む英国は、日英約定の開港規定だけでは満足せず、天津で清国との通商条約を結んだばかりのインド総督エルギン（James Bruce, 8th Earl of Elgin and 12th Earl of Kincardine）に、日本とも通商条約を締結するよう命じた。その結果、1858年8月26日（安政5年7月18日）、「日英修好通商条約」が調印され、翌年7月11日（安政6年6月12日）、批准書^{ひじゅん}が交換された。条約の内容は、外交使節の交換、5港2市の開港開市、領事裁判権、最恵国待遇（他の諸国より不利とされない条件で待遇すること）など、先に締結された日米修好通商条約（1858年7月29日調印）にならったものとなった。

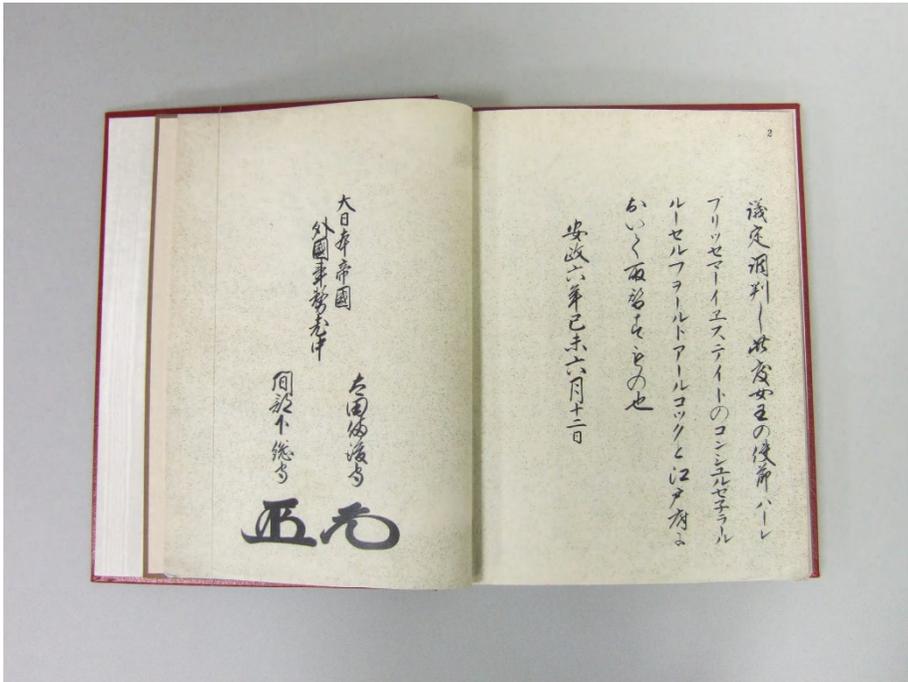
条約に基づき、英国から駐日総領事兼外交代表として、広東領事であったオールコック（Sir Rutherford Alcock）が派遣された。オールコックは高輪の東禅寺^{とうぜん}に入り、同所を仮公使館とした。



1. 日英修好通商条約（「日本国大不列顛^{ブリテン}国間修好通商条約」）重要文化財

1858年8月26日（安政5年7月18日）、インド総督エルギンと幕府が江戸で調印。1859年7月11日（安政6年6月12日）、江戸で批准書交換。神奈川・長崎・箱館・兵庫・新潟の開港、江戸・大坂の開市、領事裁判権、英国側の関税決定権、最恵国待遇などを規定。幕府側の署名者はいずれも外交に能力を発揮した官吏で、特に水野筑後守（忠徳）、岩瀬肥後守（忠震）の両名は、小栗上野介（忠順：1860年遣米使節の一員として渡米）と並んで「幕末の三傑^{はっ}」と称される。

幕末の条約書は史料編纂のため東京帝国大学に貸出中、関東大震災で罹災し、多くが焼失した。本条約書は1997年（平成9年）、焼け残った他の幕末期の条約書とともに、国の重要文化財に指定された。



2. 日英修好通商条約 日本側批准書（複製）

※原本は英国立公文書館所蔵

英国立公文書館に所蔵する日英修好通商条約（日本側批准書）の複製。2008年（平成20年）、日英外交関係開設150年を記念して英国政府より寄贈された。



徳川家茂署名・印章

参考 日英約定（「日本国大不列顛国約定」）（複製）

※原本は英国立公文書館所蔵

1854年10月14日（嘉永7年8月23日）、英国東インド艦隊司令長官スターリング提督との間で調印。英国船が長崎・箱館に寄港して薪水や食料を調達できること、今後日本が外国に対して開く港は英国に対しても開くことが規定された。

参考 エルギン使節団と条約締結交渉



エルギン肖像画

(早稲田大学図書館所蔵『The Illustrated London News』

1859年12月3日号)



全権委任状を交換するエルギン使節団と幕府の外交代表団

(L.オリファント『エルギン卿遣日使節録』より)



ヴィクトリア女王
(東京大学史料編纂所寄託
「中野健明氏関係史料」より)

3. 日英修好通商条約 英国女王批准書 重要文化財

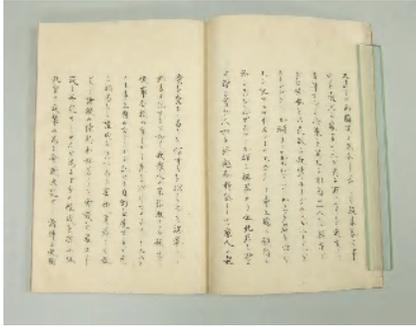
日英修好通商条約の英本国での批准裁可を証明する証書。関東大震災時の火災による損傷が激しく、熱で羊皮紙が固着してしまっただけ開くことはできないが、下方に辛うじてヴィクトリア女王(Queen Victoria)の署名が見える。



(六〇八行目)
大君奥印ありしと
女王奥印ありしと
照応し相違なきにより
相当の礼儀を整へ江戸府に於て取替すもの也

4. 日英修好通商条約 批准書交換証書 重要文化財

日英修好通商条約の批准書が正式に取り交わされたことを証明する証書。和文、英文、蘭文の3通りが作成された。



(展示部分)
 大君との両国間に現在し若くは後來起る事
 件を適宜に処置せんが為に右の事を我方より
 指揮すべき全權を得たる相当の一人を撰挙す
 るを必要とす是故に我輩ホーグウェルエーデルゲ
 ストレンゲヘール尊赫リッセルホルドアルコック君を以て
 上に記せるセイネマリーイエステイト帝王国の領内に
 於るコンシユルゼネラル官名に撰挙せり但此君は特に
 才智に富み人を得勉勵精密にして衆人に親
 愛を受けたるを信するを以て之を撰挙し
 此書に記せるが如く我衆人の甚信服する領事
 使節全權の官とせり是を以てセイネマリーイエスデ
 イト帝王国の方より上に記せる目的を達するが為
 に相当なる權威を与へたる宰相一員若くは数
 員と諸般の条約和好若くは會議を処置し
 或は平定せしめんが為に十分の權威を与ふ但
 此官を我輩の為に會議決定せし諸件に我國

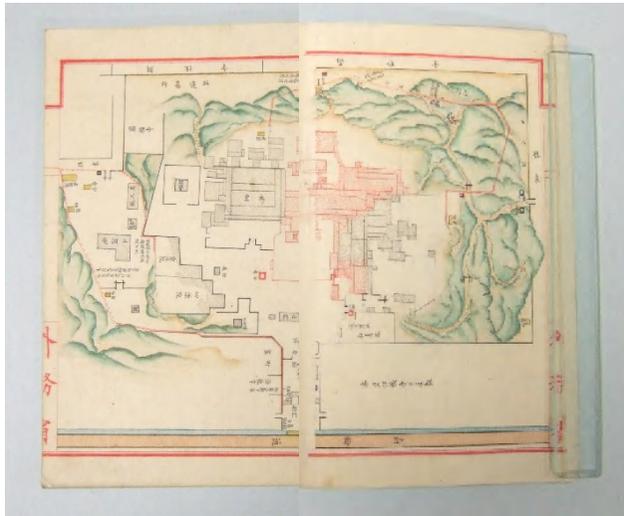
5. オールコック委任状（写）（『通信全覽』初編）

修好通商条約に基づいて派遣された英国の初代駐日外交使節（総領事兼外交代表）、オールコックの全權委任状。本史料の出典である『通信全覽』は、1859年（安政6年）および1860年（万延元年）の外交記録を幕府が編纂したもの。



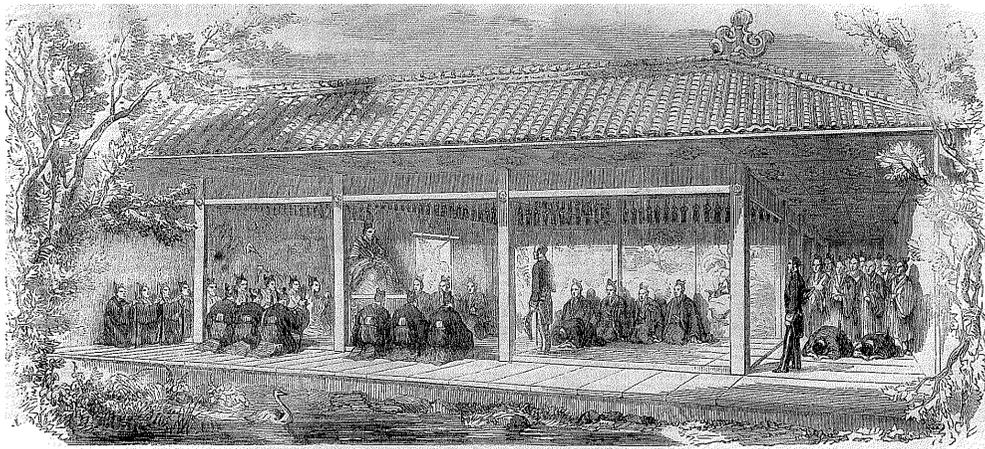
オールコック（左：東京都写真美術館所蔵 右：早稲田大学図書館所蔵）

医師から外交官に転身したオールコックは、1859年（安政6年）から1864年（文久4年）まで駐日公使を務めた。日本文化に関心と理解が深かったといわれる。滞日経験をもとに、“The Capital of the Tycoon”（邦訳『大君の都』）を著した。



6. 「東禅寺英国仮公使館之図」(『続通信全覧』類輯之部 暴行門)

英国公使オールコックは1859年6月26日(安政6年5月26日)着任、高輪の東禅寺(図の赤く彩色された部分)を仮公使館として使用した。東禅寺は現在も港区高輪にある。出典の『続通信全覧』は、明治政府が編纂した幕末外交史料集。



参考 オールコックの將軍謁見式

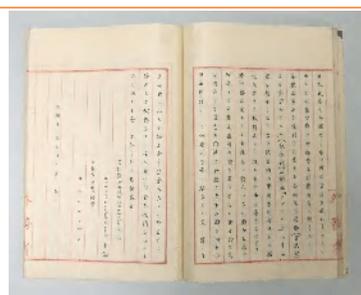
(早稲田大学図書館所蔵『The Illustrated London News』1860年12月15日号)

7. 東禅寺護衛の武士へのメダル贈与を告げる英国公使書翰（写）

（『続通信全覧』類輯之部 暴行門）

1861年7月5日（文久元年5月28日）、浪士14人が東禅寺を襲撃、英国人の書記官らを負傷させたが、護衛にあっていた幕府衛士および大和郡山、三河西尾両藩の藩士が奮闘し、暴徒を退けた。

英国政府より褒賞の金メダル1個と銀メダル82個が届けられ、幕府を通じて金メダルは大和郡山藩主柳沢保申に、銀メダルは護衛に功績のあった武士たちに贈られることとなった。



（写真右ページ中央付近）
…此度の飛脚（書状便）より金「メダイルレ」（記念錢）一個銀「メダイルレ」八十二個を落手したり右ハ使臣館の警衛を引受けたる諸侯及其とき拔群なりし役人等へ届くへきものなり：



参考 英国政府から護衛の武士に贈られたメダル(造幣局所蔵)

現在、銀メダルのうちの1個が造幣局に保管されている。直径約3.2センチ、重さ約16グラム。片面にはヴィクトリア女王の肖像と御名が、もう片面には中央に「BY THE BRITISH GOVERNMENT」、周囲に「FOR GALLANTRY IN DEFENCE OF THE BRITISH LEGATION JULY 6TH 1861」と刻印されている。

幕末維新の混乱により、メダルが実際に交付されたのは、事件から30年近くが経過した1889年（明治22年）のことであった。

開港開市延期問題と文久遣欧使節団派遣

修好通商条約に基づいた外国貿易が開始されてからも、幕府は、急激な物価上昇や攘夷の風潮の広まりを理由に、条約を結んだ各国の公使に対し、修好通商条約に定められた兵庫・新潟の開港と、江戸・大坂に外国人の居留を許可すること（開市）については、国内の政治・経済状況が安定するまで延期するよう求めた。

これに対し英国公使オールコックは、開港開市延期は条約の目的に反するという意見を述べながらも、幕府が英本国をはじめとする各締約国へ全権使節を派遣し、直接交渉することを提案した。

1862年1月21日（文久元年12月22日）、竹内下野守（保徳）を正使、松平石見守（康直）を副使、京極能登守（高朗）を目付（監察使）とする全36名（のちに2名加わる）の幕府使節団が、英国軍艦オーディン（Odin）号に乗ってヨーロッパの締約国（英国のほかにフランス、オランダ、プロシア、ロシア、ポルトガル）へと派遣された。使節団に与えられた主な役割は、①開港・開市の延期を確約すること、②西洋事情を視察すること、③ロシアとの樺太境界を定めることであった。

使節団は最初にフランスを訪れたのち英国に渡り、1862年4月30日（文久2年4月2日）、ロンドンに到着した。英国での開港開市延期交渉には、賜暇帰国中の駐日公使オールコックも加わってよく日本側を弁護したこともあり、日本側使節と英国政府は、同6月6日（5月9日）、新潟と兵庫の開港、江戸と大坂の開市を1863年1月1日から5か年延期することを取り決めた覚書（「ロンドン覚書」）に調印した。

その後使節団は他の締約国とも同様の覚書を取り交わし、約1年間に及ぶ旅程を終え、1863年1月（文久2年12月）、帰朝した。



(二年半も先の兵庫開港について心配するのは無益であると説くオールコックに対し、老中は国内人心を収めるためには兵庫開港延期が必要だと主張。以下はその後の対話)
(展示部分)

於て何と歎勸弁可仕候
 一 書翰も差遣可申貴国へ使節も差立可申候へ共
 其許周旋被致候心得無之候てハ無詮事に候
 其辺ハ如何被致候哉
 一 私於て日限差延し候儀同意ハ不仕候素より妨ハ
 致不申候間事狎れ候人を自国政府江被遣候様
 申上候事に候
 一 其許不同意之上ハ政府へ使節差遣候も無益之事に無之哉
 御書翰にて延期之事被仰遣候ハ、私よりハ私の存
 寄を認メ本国政府へ可申遣候併夫よりハ御人撰
 にて使節被差遣延期之儀ニ付利害得失御弁
 論有之候へハ可然儀と奉存候
 外ニニストルは如何候哉
 一 ハルリスヘレクル江は御逢にて御談判有之其上
 御書翰にて被仰遣候方可然奉存候私江被遣候御
 書翰は本国政府江廻し可申候

8. 老中とオールコックとの会談録(『通信全覧』二編 英国御対話書)

英国公使オールコックは1860年8月27日(万延元年7月11日)の老中との会談において、兵庫・新潟の開港、江戸・大坂の開市を延期したいとの幕府申し出は、修好通商条約の主旨に反するものであり容認できないとしながらも、ヨーロッパの締約各国へ全権使節を派遣し、本国政府と直接交渉することを提案した。

この会談録は、双方のやり取りが箇条書きにされている。一段上から始まっているのが幕府側(老中)の発言、一段下がって始まっているのが英国側(オールコック)の発言である。

9. 文久遣欧使節団 竹内下野守写真

開港延期交渉のためヨーロッパに派遣された使節団(文久遣欧使節団)の正使、竹内下野守(保徳)の肖像写真。竹内は箱館奉行から勘定奉行となり、使節派遣にあたって外国奉行を兼任した。



参考 文久遣欧使節団随員写真

1885年(明治18年)、花房義質駐露公使がロシアの海軍中将より受贈した使節団員の肖像写真。正使竹内を含めた24名分を外交史料館で所蔵している。これらの写真はロシア・ペテルブルクで撮影されたもので、それぞれに自筆の署名が入っている。この使節団には、福沢諭吉、福地源一郎、松木弘安(後の寺島宗則)など、明治維新後に活躍する人材が随行していた。





通詞・唐通詞
太田源三郎

通詞・外国方翻訳局員
福沢諭吉

通詞
立広作

翻訳方兼医師
箕作秋坪



医師
高島祐啓

医師
川崎道民

竹内下野守家来
長尾丈輔

松平石見守家来
市川渡



京極能登守家来
岩崎豊太夫

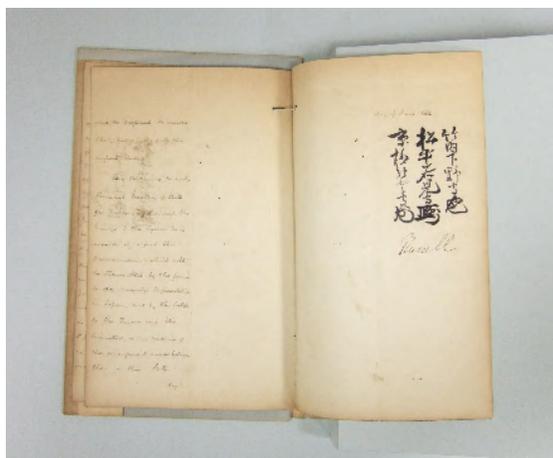
伊勢屋八兵衛手代
重兵衛

勘定格調役
淵辺徳蔵

調役格通井御用頭取
森山多吉郎

10. 文久遣欧使節団 随員名簿

オランダで作成された遣欧使節団の名簿。ライデンの出版社 A.W.Sythoff が漢字、かな文字を使って印刷した。



11. ロンドン覚書（「^{ロンドン}倫敦約定」） 重要文化財

使節団は1862年5月16日（文久2年4月18日）よりロンドンでの交渉を開始し、同6月6日（5月9日）、開港開市を1863年1月1日から5年延期することを取り決めた覚書に調印した。この覚書には、開港開市延期を認める代わりに、日本が修好通商条約の取り決めに徹底すべきことが明記された。

日本側3使節（竹内、松平、京極）と、当時の英国外相ラッセル（John Russell, 1st Earl Russell）が署名。

参考 ロンドン万国博覧会と遣欧使節団



ロンドン博覧会を見物する遣欧使節団(上)

ロンドン博覧会の日本コーナー(下)

(早稲田大学図書館所蔵『The Illustrated London News』1862年5月24日号、同9月20日号)

一行の滞在中、ロンドンでは万国博覧会が開催されており、日本コーナーにはオールコックが収集した日本品が陳列されていた。

明治維新期の日英交流

1865年7月8日（慶應元年5月16日）、オールコックの後を継いで駐日特命全権公使（兼総領事）に着任したパークス（Sir Harry Smith Parkes）は、1883年（明治16年）までその地位にあった。

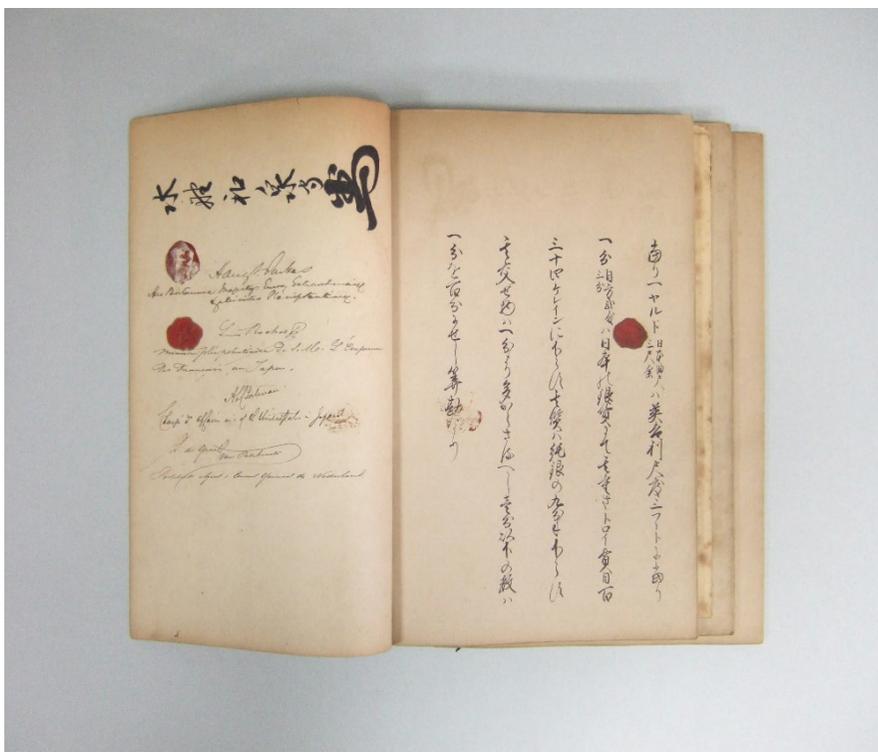
パークス着任の時期、英国は日本に外交使節を置く列国の中でも、対日貿易額、海軍力において他を圧倒し、対日政策を主導する発言力を築いていた。英国は修好通商条約締結以来、同条約の目的とする自由貿易の理念を、英国側の満足する形で実現することを目指した。パークスは忠実にこの方針に沿い、開港の促進や条約の勅許（ちよっきよ 天皇の許可）取得、輸入品に対する関税の引き下げなどを幕府に強く要求した。

パークスは、幕府との関係を維持しながらも、薩英戦争や下関戦争を経た薩長両藩が開国に転じると、これら倒幕勢力に接近し、幕府を支持するフランス公使ロッシュ（Léon Roches）と対立した。また戊辰戦争中は、厳正な局外中立を提唱して列国の介入を阻止する一方、新政府成立の通牒が発せられると、1868年3月（慶応4年2月）の各国公使天皇謁見の実現に協力し、同年5月（同3月）には、自らの信任状を天皇に奉呈することで、列国に先がけて新政府承認を表明するなど、明治政府の成立を援助した。

1869年（明治2年）のエディンバラ公（Duke of Edinburgh）訪日は、外国王族の接遇という新しい問題を明治政府に提起した。

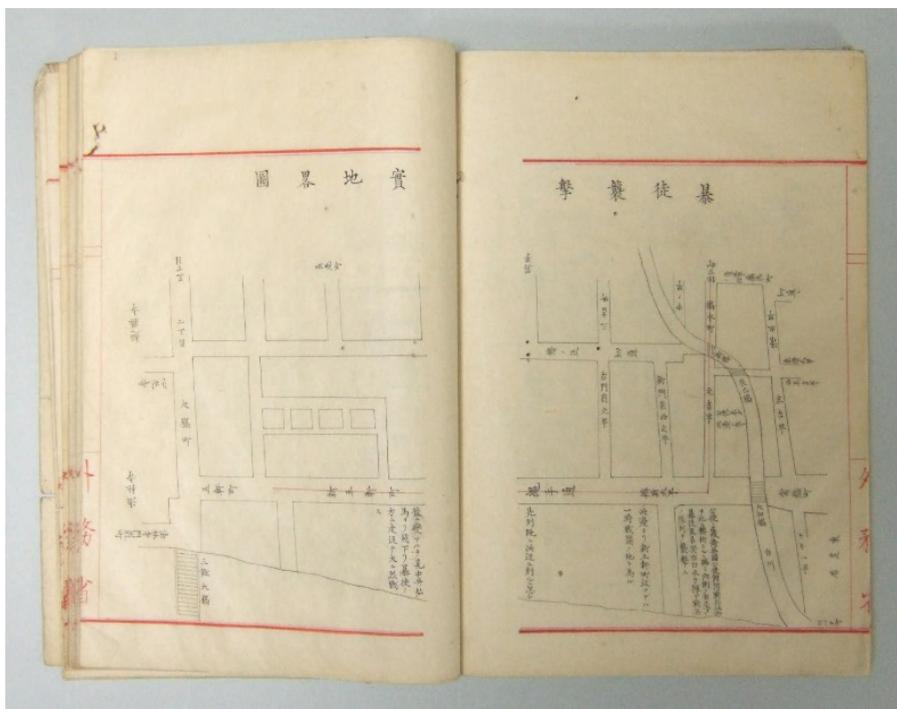
ヴィクトリア女王の第2王子であるエディンバラ公は、当時海軍大佐でもあり、軍艦ガラティア（Galatea）号の艦長として世界周遊の途中であった。パークスは同公が天皇と対等の立場で面会することを希望し、これに対して政府、宮中で賛否両論の検討が行われた結果、同公を国賓として遇することに決まった。エディンバラ公の来日は、外国の王族が日本を訪問した最初の事例であり、事前に慎重に計画が練られ、詳細な接遇要領が作成された。

エディンバラ公は1869年8月29日（明治2年7月22日）に来日し、その3日後、明治天皇に謁見した。滞在中は延遼館（えんりょう 後の浜離宮）に宿泊した。



12. 「改税約書」 重要文化財

1866年6月25日（慶應2年5月13日）、関税の引き下げを骨子として英・米・仏・蘭の4か国との間に調印した協定。修好通商条約で20%と定められた関税率が、過去4年間の平均価格を基準とする5%の従量税（じゅうりょうぜい重さや個数に応じて課税する方式）に改められた。同年7月1日（慶應2年5月19日）より実施。税則以外にも、より自由な貿易を実現するための英国の意向を反映した様々な規定が盛り込まれている。



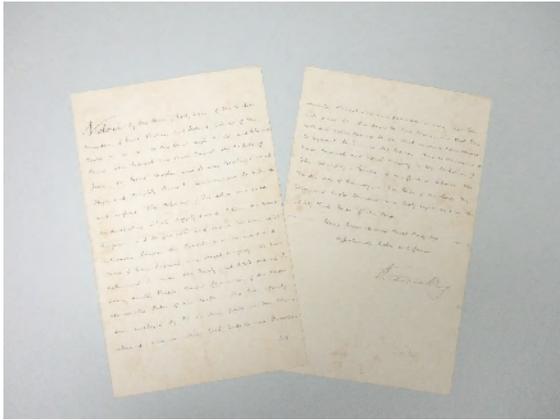
13. パークス襲撃地点略図

(坂田諸遠編『英仏蘭三公使戊辰京都参朝記聞』)

1868年2月(慶応4年1月)の詔勅において、開国を国の基本方針とすることが宣言され、新政府は各国公使の天皇謁見式を計画した。

謁見が予定されていた1868年3月23日(慶応4年2月30日)、英国公使パークスの隊列は宿泊所の知恩院から出発したが、その先頭が三条大橋付近の五軒町に差しかけたところで、浪人が躍り出て護衛の英国公使館付騎兵に襲いかかった。パークスに危害は及ばなかったが、護衛兵10名が負傷し、参内は日を改めて行われた。

なお、本史料を編集した坂田諸遠は明治維新期の有職故実研究家で、『続通信全覧』の編纂者の一人でもあった。



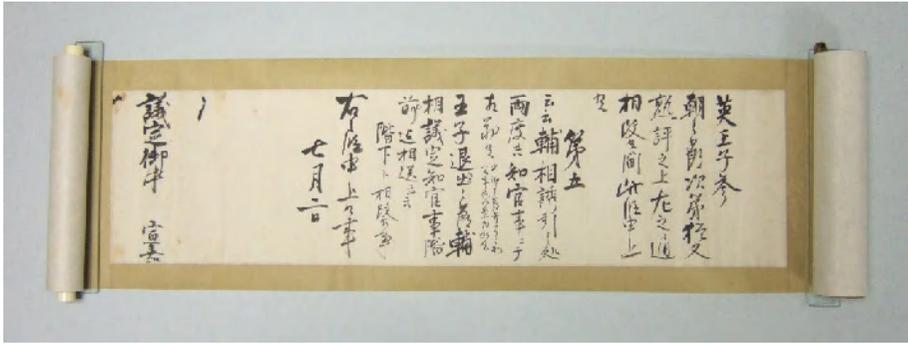
14. ヴィクトリア女王より明治天皇宛 特命全権公使パークスの信任状

1868年2月4日付の国書。襲撃事件の翌月、パークスが天皇に奉呈したもの。
大政奉還後も幕府は外交権の保持を宣言していたが、パークスは本来將軍に渡るべきこの国書を天皇に奉呈した。これは、英国が他国に先がけて明治政府を承認したことを意味する行動であった。



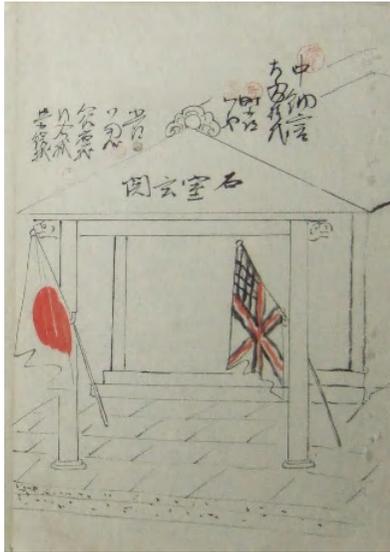
パークス（東京都写真美術館所蔵）

1865年7月8日（慶應元年5月16日）、駐日特命全権公使（兼総領事）に着任。日本在勤は20年近くに及んだ。



15. 英国王子訪日に関する澤宣嘉書翰

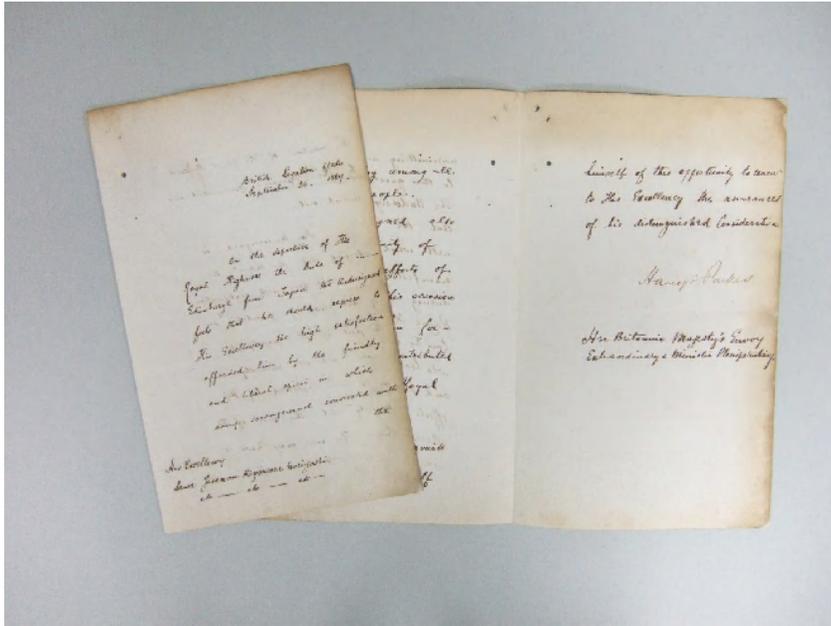
明治2年7月2日付。エディンバラ公来朝に関する澤宣嘉書翰。エディンバラ公の接遇要領として作成された「英国王子参朝接待次第」の字句修正を求める内容。澤はこの書翰の日付から6日後の1869年8月15日（明治2年7月8日）、初代外務卿（現在の外務大臣にあたる）に就任した。エディンバラ公の来日は8月29日（7月22日）のこと。



エディンバラ公
（東京大学史料編纂所寄託
「中野健明氏関係史料」より）

16. 延邊館石室入口の図

エディンバラ公が滞在した延邊館玄関口の企画図。同館は、旧幕府が海軍伝習所の生徒控所として建築中であつた建物に西洋風の営繕を加え、接待所としたものである。



パークスのサイン

17. 明治政府のエディンバラ公への接待振りに感謝するパークス書翰

1869年9月25日（明治2年8月20日）付。エディンバラ公に対する明治政府の手厚いもてなしに対し、パークスは澤外務卿に書翰を送り、感謝と満足を表明した。

主要参考文献

外務省記録「幕末外交関係雑纂」

外務省記録「外国貴賓ノ来朝関係雑件 英国之部 英国「ジュック・エットウインブルグ」親王来朝ノ件」

外務省記録「外国褒賞及記章本邦人へ贈与雑件 英国之部」

外務省編『旧条約彙纂』（外務省条約局 1934年）

外務省編『日本外交年表並主要文書（上）』（原書房 1965年）

外務省百年史編纂委員会編『外務省の百年（上）』（原書房 1969年）

日本外交史辞典編纂委員会編『新版 日本外交史辞典』（山川出版社 1992年）

尾佐竹猛『夷狄の国へ 幕末遣外使節物語』（萬里閣書房 1929年）

岡義武『黎明期の明治日本』（未来社 1964年）

田辺太一『幕末外交談』〔東洋文庫〕（平凡社 1966年）

石井孝『増訂 明治維新の国際的環境』（吉川弘文館 1966年）

鹿島守之助『日本外交史1 幕末外交』（鹿島研究所出版会 1970年）

犬塚孝明『明治維新対外関係史研究』（吉川弘文館 1987年）

太田昭子「外交官の肖像 オールコック」（『外交フォーラム』1989年3月号）

田中正弘『通信全覧総目録・解説』（雄松堂出版 1989年）

木畑洋一他編『日英交流史1 政治・外交I』（東京大学出版会 2000年）

『開国150周年記念資料集「江戸の外国公使館」』（港区立港郷土資料館 2005年）

宮永孝『幕末遣欧使節団』〔講談社学術文庫〕（講談社 2006年）

画像提供

造幣局（ヴィクトリア女王より贈与のメダル）

東京大学史料編纂所（文久遣欧使節随員肖像）

同史料編纂所寄託「中野健明氏関係史料」（ヴィクトリア女王、エディンバラ公肖像）

東京都写真美術館（オールコック、パークス肖像）

早稲田大学図書館（『The Illustrated London News』、オールコック肖像）

関連年表

年月日	(和暦)	事項 (※は展示史料番号)
1854.9.7	嘉永 7.7.15	英国東インド艦隊のスターリング提督長崎に来航
1854.10.14	嘉永 7.8.23	「日英約定」成立
1858.8.26	安政 5.7.18	「日英修好通商条約」調印(※1、2)
1859.6.26	安政 6.5.26	オールコック着任、東禅寺に英国仮公使館開設(※5、6)
1859.7.11	安政 6.6.12	「日英修好通商条約」批准書交換(※3、4)
1860.2.21	安政 7.1.30	オールコック、総領事から公使に昇格
1860.8.7	万延 1.6.21	老中、オールコックに開港開市延期を提議
1860.8.27	万延 1.7.11	オールコック、幕府側に使節派遣を提案(※8)
1861.7.5	文久 1.5.28	東禅寺襲撃事件(第一次東禅寺事件)(※7)
1862.1.21	文久 1.12.22	遣欧使節竹内保徳ら品川より出発(※9、10)
1862.3.23	文久 2.2.23	オールコック賜暇帰国
1862.5.16	文久 2.4.18	遣欧使節、英国で開港延期交渉開始
1862.6.6	文久 2.5.9	「ロンドン覚書」調印(※11)
1862.9.14	文久 2.8.21	生麦事件
1863.1.28	文久 2.12.9	遣欧使節帰朝
1863.8.15	文久 3.7.2	薩英戦争
1864.9.5-7	文久 4.8.5-7	英仏米蘭連合艦隊下関砲撃
1865.7.8	慶応 1.5.16	新任駐日公使ハリー・パークス横浜に来着
1865.11.22	慶応 1.10.5	条約勅許下る
1866.6.25	慶応 2.5.13	「改税約書」署名(※12)
1867.11.9	慶応 3.10.14	徳川慶喜、大政奉還を申し出(翌日朝廷受諾)
1868.3.23	慶応 4.2.30	仏、蘭公使京都で天皇に謁見、パークス遭難事件(※13)
1868.3.26	慶応 4.3.3	パークス、京都で天皇に謁見
1868.5.22	慶応 4.4.1	パークス、大坂で天皇に信任状奉呈(※14)
1869.8.15	明治 2.7.8	外務省設置(初代外務卿澤宣嘉)
1869.8.29	明治 2.7.22	英国王子エディンバラ公来日(※15~17)

特別展示「日英交流事始—幕末から明治へ—」

外務省外交史料館

〒106-0041 東京都港区麻布台 1-5-3

電話：03-3585-4511

URL：<http://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/honsho/shiryo/>